小児救急について
～予防接種を受けよう！～

西条市医師会理事
高橋こどもクリニック
院長　高橋 貢

救急と予防接種の関係？

皆さまはあまり関係ないと思われるかも知れません。実は意外と深い関係があります。

細菌性髄膜炎とロタウイルス胃腸炎を通して説明させていただきます。

■細菌性髄膜炎

細菌性髄膜炎とは脳や脊髄をおおう膜に細菌が感染する病気で、抗菌薬の発達した現在でも死亡率は10パーセント、難聴、精神障害などの後遺症は20～30パーセントにみられる非常に怖い病気です。その頻度は決して高くありませんが、国内で1年間に1000例くらい発症しています。原因となる細菌の代表がインフルエンザ菌b型（ヒブ）と肺炎球菌です。

最近10年間での西条、新居浜、四国中央市の細菌性髄膜炎症例をまとめてみました。その結果をお示しします。

年齢と原因菌では、生後2日目、10日目のB群溶連菌（GBS）が2例で、3カ月から4歳児のインフルエンザ菌b型（ヒブ）11例、肺炎球菌4例でした（下図）。現在、5歳未満の子どもに対してヒブワクチンと肺炎球菌ワクチンが公費負担なっていることが納得できると思います。

新生児のB群溶連菌髄膜炎を除く、ヒブと肺炎球菌髄膜炎15例のまとめです。主要症状では発熱は全例で認められ、嘔吐（おうと）は8例、けいれんは4例、意識障害は5例に認められました。診断までに6例が9回時間外受診をしていました。発症から受診までは平均約10時間であり、発症早期に受診していましたが、診断されたのは約1・6日目で、11症例は通常診療時間内の小児科で診断されていました。

そのほとんどがかかりつけ小児科でした。入院期間は14日から50日で平均26日でした。

治療結果では幸いなことに死亡例はありませんでしたが、てんかん2例を含む4例に後遺症が認められました。

日本では、平成20年12月にヒブワクチン、平成22年2月から肺炎球菌ワクチンの接種が可能となりました。

当初は有料で、2つとも接種すると2万円くらいかかりました。平成22年度から全国的に公費負担となり、接種率が格段に向上しています。そしてワクチンの接種率の向上とともに、平成23年度で早くもヒブ髄膜炎は約60パーセント、肺炎球菌髄膜炎は25パーセントも減少しています。

■ロタウイルス胃腸炎

ロタウイルスは乳幼児の急性重症胃腸炎の主な原因であり、国内で毎年120万人が発症し、そのうち8万人近くが入院しています。

突然の嘔吐、米のとぎ汁のような白い下痢便、発熱などで発症し5歳までにほとんどの小児が感染します。下痢や嘔吐からくる脱水だけでなく、群発型けいれん（何度もけいれんを繰り返す）や脳炎・脳症をおこすこともある非常に怖い疾患です。

WHO（世界保健機関）はロタウイルスワクチンを世界中のすべての小児に接種することを推奨しています。現在120カ国以上で発売され、アメリカ、オーストラリア等では公費で接種され、外来患者数、救急患者数、入院患者数の減少が確認されています。

現在2種類のロタウイルスワクチンが使用できますが、残念ながら公費でなく、自己負担となっております。費用は2万数千円と高価であり、まだ接種率は高いとは言えません。ワクチンの接種率が上がれば、接種した小児の重症化を防ぐのみでなく、集団免疫効果で保育園などの集団をロタウイルス感染から守ることも可能となります。

■予防接種の大切さ

接種率の向上は公費助成がカギです。ワクチンで予防した方が総医療費は安くなるということも明らかにされています。ぜひ西条市でも公費助成がされることを望みます。

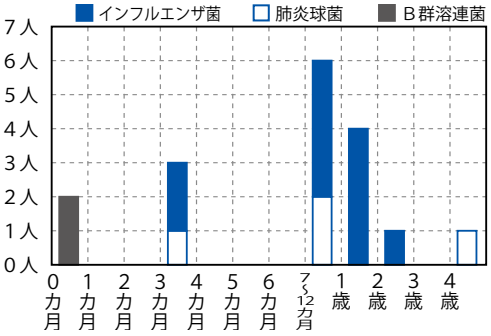
現在、20余の自治体で公費助成がされています。名古屋市の河村市長の言葉を引用します。『接種費用を出せない人を応援することは人としての愛情、温かみです。皆さんが納める貴重な税金を、次世代を担う子どもたちのために使いたい』

攻撃は最大の防御なり！

病気への攻撃は予防接種であることは言うまでもありません。接種することで、こんなに怖い病気にかかる危険性を減らすことができるのです。

さあ母子手帳を確認してください。まだできていない予防接種があれば、明日にでもやりましょう！　予防接種で防ぐことのできる病気はすべて受けることをお勧めします。

6週からのロタウイルスワクチン、2カ月からのヒブ、肺炎球菌ワクチンデビューは若いお母さんを中心に定着しつつあります。その他BCG、DPT（三種混合）、ポリオなどなどたくさん受けなければならないワクチンがあります。かかりつけの先生と相談し順序よく接種されることをお勧めします。

予防接種を受けることで、時間外の救急受診が減ることは患者さんにとっても医療従事者にとっても幸せなことだと思います。

【最近10年間の西条、新居浜、四国中央市の細菌性髄膜炎症例】